

ある。

そのような中、栽培水産試験場では小さい種苗であつても必ず持っている遺伝子を使用した判別技術が現在進められており、一定の成果も上がっている。

近い将来、この判別技術が確立されればせきたな町においても放流事業の成果が目に見えてあらわれるものと考えらる。

(2) マゾイ事業

平成18年から放流基礎調査事業を実施し、これまでに47万3千尾を放流しています。その中の3万6千尾の稚魚には外部標識(スバゲイタグ)を付けて放流し、現在までに6尾再捕されている。また、平成22年度にはDNA鑑定により、捕獲した195尾中36尾が放流種苗と確認され、混獲率は18.5%であつた。これまで栽培水産試験場の全面的な協力支援を頂いて放流基礎調査を実施し、一定の成果が上がってきていることから、今後も種苗放流を継続

することにより、漁業者自らが取り組むことで、資源を増やす意識が芽生え、前浜漁業の振興が図られるものと思われ。

◎視察先

◇苫小牧市・株式会社四季舎◇

1 調査事項

通信販売事業(産地直送)等について

(1) 通信販売事業

通信販売事業を始めるきっかけは、東京での道産食品人気の高さを目の当たりにしたことによるもので、北海道から全国の消費者へ商品を直接届ける事業に可能性を感じたため。

企業当時はまだ「地産地消」という言葉もなく、何からどう手をつけていいのかわからない状態であり、道内の企業名簿を見ながら電話をかけ、会ってくれるとなれば稚内・根室までも足を運び、200社以上訪ね歩いた。

起業2年目には、取扱商品の仕入れ先が固まり、ふるさと小包に参入し、ダイレクト

メールでの注文販売を始める。当初の発送先は苫小牧市の一部だったが、競争業者がなかったことから、全道全国へと注文が増えて行った。

平成14年には不況で道内企業が軒並み規模縮小を迫られる中、低金利と就職氷河期を味方につけ本社工場を移転し、職員も大幅に増やした。

また、工場内に製造ラインを新設することによって通信販売以外に自社ブランド菓子



四季舎視察調査

の販売も本格的に開始した。他社に先駆けて始めたインターネット販売も順調に拡大し、1000万円程度だった売り上げが、10数億円を超えるまでに成長した。

(2) 今後の目標について

一昨年に5カ年計画を立てて、5年以内に他町へ自社店舗(フルールブラン)を5店舗出店させる予定となっている。

また、店舗事業を全体の売り上げの50%まで上げること目標としている。

2 調査による考察

現在のインターネット社会では、地域の若手就労者・後継者に地産地消を意識させ、生産者自らがインターネットを通じてグローバルに消費者へ直接発信していくことが大切であると考ええる。

また、当町としても安全・安心にこだわった地元農水産物、加工品を消費者に伝えるために、リアルタイムで発信していく仕組みづくりが必要であると思われる。

◎調査先

◇岩見沢市・いわみざわ農業協同組合◇

1 調査事項

水稲直播の取り組みについて

(1) J A いわみざわ地域の概要

位置と地勢

J A いわみざわ地域は、石狩川沿いの東に位置する平坦地であり、石狩平野の豊穡な穀倉地帯の中心にある。

古くから道内有数の米産地であるが、近年は玉ねぎや白菜、キュウリ、メロン、長ネギ、人参、カボチャ、花卉など多種にわたって生産されている。

経営耕地面積等

経営耕地面積

(全体1万8230ha)	
・水稲	7574ha
・小麦	3981ha
・玉ねぎ	1241ha
・蔬菜	816ha
・豆類	1388ha
・その他	3230ha

米品種別作付面積

・きらら397	3120ha
・ななつぼし	2950ha
・おぼろづき	700ha
・ほしのゆめ	197ha
・その他	498ha
・もち	109ha

(2) いわみざわの水稲直播栽培

①現状

平成23年直播栽培面積	
・北海道	900ha
・空知管内	700ha
・岩見沢市	277ha
・妹背牛町	150ha
・美唄市	120ha
・その他	153ha

②直播の種類と生産費、労働時間の比較

湛水直播(20ha規模)

・特徴

代播き後に専用の播種機で播種。

- ・10a当り生産費 8万7245円
- ・10a当り労働時間 9.3時間
- ・メリット

と同じで、個人でも取り組みやすい。
・デメリット
播種機は専用機である。
落水出芽法の体得が必要。
乾田直播(20ha規模)
・特徴
乾田に碎土後トラクターの作業機で播種。
・10a当り生産費 8万8627円
・10a当り労働時間 8.6時間
・メリット
作業機は麦・大豆と共用できる。
播種効率が高い。
・デメリット
鎮圧ローラーなどの作業機と大型トラックが必要。
共同播種作業が必須。
③作付品種
J A いわみざわ管内では大地の星を専用品種としている。
大地の星は業務用米で多収が可能。(10a当り約10俵)

栽培技術マニュアル
普及センターの協力を基に、栽培マニュアルとして「直まき10俵とり指南書」を生産者に配布し、省力・多収・減農薬に努めている。
⑤指導体制
J A いわみざわ米穀部・J A 各支所と連携し、巡回指導を徹底している。各生産者の生育状況の全戸把握を基本とし、迅速な現地対応を行っている。
2 調査による考察
水稲基幹地域での経営規模拡大は、労働力の減少という、相反する条件の下で進んでいくものと考えられるが、土地利用型作物栽培だけでは、所得向上は極めて難しい。
直播栽培の導入は、春先の水稲作業時間の省力化を実現でき、高収益作物の導入を可能にする。これは、今後更に米価引き下げが予想されるなかで、水稲基幹地域での農家所得の維持・向上に大いに貢

献できる栽培法である。
しかし、当町の現状では、一戸当たりの経営規模は10ha以下が多く、直播栽培の導入は、機械投資の増加を招き、逆に所得を減らすことに繋がりが兼ねず、そこで小規模で今後とも営農を継続する場合の直播栽培導入にあつたての考え方として、集団(共同)で機械を購入し、かつ国・道の交付金を活用することにより、機械に関わる投資を少なくすることで実現できるものと考ええる。
また、いわみざわ地域で取り組まれている乾田直播栽培は連作障害対策の一環としての意味合いが強く、作付品種も業務用米(大地の星)である。
当町は、すでに数戸の農家で良食味米(低たんぱく米)の生産を目標として湛水直播栽培を本格的に実施しており、今後も湛水直播栽培に取り組み農家が増加すると思われる。このように栽培方法や位置づけは違うが、目指す目標は同じであることから、今



J A いわみざわ視察研修